

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11文明堂3F  
電話 三五四二-1547 一五四七一

清元協会

世田谷区桜ヶ丘4-9-18  
電話 三七〇六-1952 二七七八

財団法人 古曲会

中央区銀座八ノ六ノ三 新橋会館  
電話 三五七一-〇二一六

新内協

新宿区大久保二の二三の二  
電話 三三〇〇-四六五三

常磐津協会

港区南青山五ノ十三ノ三  
電話 三四〇七-七四五三

社団法人 長唄協会

中央区銀座二の十一の十九の四  
電話 三五四二-六五四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二ノ十五ノ十二ノ四〇三  
電話 三五八五-一九一六  
(五十音順)

平成十二年三月七日(火)

国立劇場小劇場

第一部

正午開演

三時半終演

第二部

午後四時開演

七時半終演

2000 都民芸術フェスティバル

第三十回 邦楽演奏会

邦楽名曲選

助成東

京

都

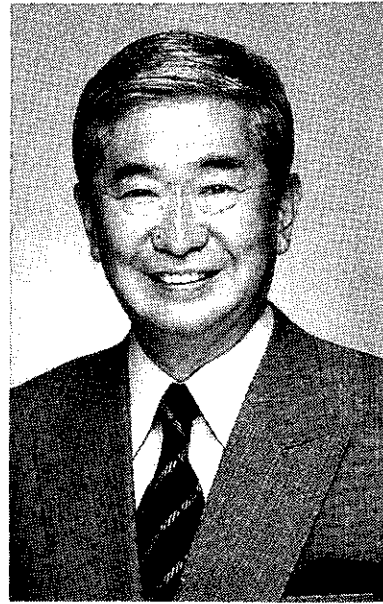
芸団協・邦楽振興基金



# 2000都民芸術フェスティバル公演一覽

分野	種目	演目	期日・会場	問い合わせ先		
音	オペラ	R. ショトラウス作曲 「無口な女」(全3幕) (東京オペラ・プロデュース)	2/23・24 なかのZEROホール	東京オペラ・プロデュース Tel. 03-3530-5181		
		モーツァルト作曲 「魔笛」(全2幕) (二期会)	2/25・26・27 東京文化会館	(財)二期会オペラ振興会 Tel. 03-3796-1831		
		ヴェルディ作曲 「椿姫」(全3幕) (藤原歌劇団)	3/12・15・17・18 東京文化会館	(財)日本オペラ振興会 Tel. 03-5466-3185		
楽	オーケストラ	新星日響 東京シティ・フィル 新日本フィル 都響 東フィル 東響 日本フィル N響 読響	1月30日 東京芸術劇場 2月4日 東京芸術劇場 2月11日 東京芸術劇場 2月16日 東京芸術劇場 2月27日 東京芸術劇場 3月11日 東京芸術劇場 3月16日 東京芸術劇場 3月20日 東京文化会館 3月24日 東京芸術劇場	(社)日本演奏連盟 Tel. 03-3437-6837		
		ポピュラー	永遠のラテン名曲集 シャンソン&タンゴハイライト スタンダードをあなたに ~リズム~	3/8 よみうりホール 3/9 よみうりホール 3/10 よみうりホール	(社)日本音楽家協会 Tel. 03-3583-3903	
		邦楽	第30回邦楽演奏会	3/7 国立小劇場	日本三曲協会 Tel. 03-3585-9916	
		演劇	パフォーマンスサーカス 「サーカス物語」	3/15~3/26サーカステント (二子玉川園下車ナムコワンダー・エッグ・奥)	(社)日本劇団協議会 Tel. 03-3341-8151	
		児童青少年演劇	ミュージカル「ピノ」<ピノキオより>	3/19~3/31 東京芸術劇場 他	日本児童・青少年演劇劇団協議会 Tel. 03-5353-6821	
		舞	バレエ	「眠れる森の美女」	2/11・12・13 東京文化会館	(社)日本バレエ協会 Tel. 03-3499-5524
				「白鳥の湖」(全幕)	3/10・11・12 ゆうほうと簡易保険ホール	牧阿佐美バレエ団 Tel. 03-3360-8251
				ノイマイヤー新作世界初演 「時節の色」他	2/4・5 ゆうほうと簡易保険ホール	東京バレエ団 Tel. 03-3791-7000
踊	現代舞踊	「境界線上の記憶… 終末の枝…」、「白雪姫と七人の小人たち」、「隣の楽園」	1/27・28 東京文化会館	(社)現代舞踊協会 Tel. 03-3400-4544		
	日本舞踊	第43回日本舞踊協会公演	2/7・8・9 国立劇場大劇場	(社)日本舞踊協会 Tel. 03-3533-6455		
伝統芸術	能楽	第27回都民能 第40回式能	1/22 国立能楽堂 2/20 国立能楽堂	(社)能楽協会 Tel. 03-3574-6441		
	民俗芸能	第31回 東京都民俗芸能大会	3/4・5 東京芸術劇場	東京都民俗芸能大会実行委員会 事務局 Tel. 03-3462-1351		
	寄席芸能	第30回都民寄席	2/13~3/17 東京芸術劇場 他	都民寄席実行委員会事務局 Tel. 03-5286-0874		

## 2000 都民芸術フェスティバルの開催に寄せて



東京都知事 石原慎太郎

都民芸術フェスティバルは、質の高い芸術文化に触れる機会を広く都民の皆さんに提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を目的として東京都が芸術文化団体の公演に助成して開催するものです。

本フェスティバルは今年で32回目を迎えました。開催を心待ちにする方も多く、今や東京の新春を彩る恒例行事として定着しており、これまでの関係団体の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

芸術文化は暮らしの豊かさの源泉であり、都市の魅力の重要な要素であります。21世紀において、東京がその魅力と活力を世界にアピールしていくためにも、多彩な文化活動が展開され、創造的な芸術文化が東京から生まれていくことが必要です。東京都としては、芸術文化活動の振興のために様々な支援を行うとともに、都民の皆さんが文化を身近なものとして享受できるような環境を整えてまいりたいと思っております。

二〇〇〇年代の幕開けに、皆さんには、新春の1月22日から桜のほころぶ3月31日まで、都内各地で繰り広げられる音楽や演劇、舞踊、伝統芸能など各分野にわたる多彩な芸術文化を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。

終わりに、本フェスティバルに参加された邦楽連合会の皆様のご成功と今後ますますのご活躍を祈念して、挨拶とさせていただきます。



四、新内明烏夢泡雪——雪責——

淨瑠璃	富士松	加賀	三味線	新内	仲三郎
同	富士松	魯遊	同	新内	勝史郎
同	鶴賀	喜代寿	同	鶴賀	喜代寿郎
同	富士松	佐賀吉	同	岡本	宮之助
同	鶴賀	須磨寿々	上調子	新内	剛士
同	新内	光千之			

五、清元復新三組 蓋 (傀儡師)

淨瑠璃	清元	延千宗	三味線	清元	延古摩
同	清元	延洲寿代	同	清元	延崇美津
同	清元	延千惠香	上調子	清元	延古摩寿
同	清元	延八千代			

七、長唄京鹿子娘道成寺

唄	杵屋	喜三郎	三味線	杵屋	五三郎
同	吉住	小三郎	同	杵屋	寒五郎
同	柏村	庄太郎	同	松永	忠五郎
同	芳村	伊十郎	同	杵屋	弥七
同	和歌山	富司郎	同	杵屋	弥七
同	杵屋	勝太郎	同	杵屋	佐武郎

囃子

笛	小鼓	小鼓	小鼓	小鼓	小鼓	大鼓	立鼓	立鼓	太鼓
福原	梅屋	望月	藤舍	仙波	仙波	仙波	仙波	仙波	仙波
寬	太郎	太郎	鳳	彦	宏祐	元章	和典	大和	大和

六、常磐津 乘合船恵方万歳

淨瑠璃	常磐津	松尾太夫	三味線	常磐津	英寿
同	常磐津	津太夫	同	常磐津	菊志郎
同	常磐津	和洗太夫	上調子	常磐津	菊与志郎
同	常磐津	和英太夫			



四、三曲寿くらべ

箏 中田博之 三絃 鳥居名美野  
同 高野和之  
同 萩岡松韻 尺八 青木鈴慕

唄 山勢松韻  
同 高橋榮清  
同 中能島弘子  
同 藤井千代賀

五、新内関取千両幟——稻川内から相撲場——

浄瑠璃 新内光翁太夫 三味線 新内勝一朗  
同 鶴賀伊勢太夫 同 新内誠十朗  
同 新内勝英太夫 上調子 鶴賀伊勢一郎

六、清元深山桜及兼樹振(保名)

浄瑠璃 清元延寿太夫 三味線 清元栄三  
同 清元初栄太夫 同 清元一多郎  
同 清元志寿子太夫 上調子 清元勝三郎  
同 清元清栄太夫

七、義太夫新版歌祭文——野崎村——

久作竹本朝重 三味線 鶴澤津賀寿  
お光竹本駒之助 ツレ 鶴澤寛也  
お染竹本綾一 同 鶴澤駒治  
同 同 同 同 同 同 同 同  
久松竹本越孝 同 鶴澤弥吉  
油屋後家竹本越若 同 鶴澤三寿々  
同 同 同 同 同 同 同 同

同 鶴澤津賀栄  
同 鶴澤喜恵博  
同 鶴澤紋栄  
同 鶴澤津賀栄  
同 鶴澤三寿々  
同 鶴澤弥吉  
同 鶴澤三寿々  
同 鶴澤津賀栄

## 曲目解説（演奏順・竹内道敬）

### 第一部

#### 一、河東節 助六由縁江戸桜

宝暦十一年（一七六一）春、江戸市村座初演。金井三笑作詞、初世山彦河良作曲。

河東節の始まりは享保二年（一七一七）正月。初めは江戸生れ江戸育ちの浄瑠璃として歌舞伎の舞台に出演していたが、やがて常磐津や富本などに押されて、劇場からはなれ、札差をはじめとする豪商や大店の旦那衆などが最頂にして、富裕階級の楽しみものとなった。しかし歌舞伎十八番の「助六由縁江戸桜」だけは別格で、旦那衆たちが舞台の御簾内で語り、江戸っ子の代表である助六の応援をした。もちろん魚河岸と吉原も同じで、鉢巻と下駄を贈る慣わしが続いた。とくに市川団十郎家との縁が深く、歌舞伎とその音楽で、素人が出演するただひとつの例外というのが特色。この慣習は今日まで伝わり、今年一月には新橋演舞場で市川新之助の助六に出演して、芝居を盛り上げたことが忘れられない。

今年のこの演奏会が三十回を迎えるという記念なので、その祝賀の意味をこめて、新橋演舞場に出演した河東節十寸見会連中がこの曲を演奏する運びとなった。花川戸の助六実はず曾我の五郎が、江戸吉原に入り込み、喧嘩を売って源氏の銘刀を探すという筋だが、その助六が花道から登場するための音楽。筋をはなれて、江戸歌舞伎の儀式性、饗宴性、庶民性などの要素が十分に発揮されている名曲。

#### 二、三曲 六段の調

八橋検校作曲。ただし北島検校作曲とする文献もある。

日本音楽には珍しい器楽曲で、それも各段五十二拍子で、初段だけ二拍子多いという構成をとっている。成立については詳しい研究があり、もともとポピュラーな曲だが、しかしそれだけに演奏はたいへんである。今日の演奏会が三十回を迎えるので、祝賀の意を含めて大勢の演奏となった。合奏の楽しさを味わっていただきたい。

## 二、義太夫 壺坂観音靈験記

明治新作浄瑠璃。通称「お里沢市」。福地桜痴（一説に伊東椿増）が作ったという浄瑠璃に、二世豊沢団平の妻千賀が加筆してできた。二世豊沢団平作曲。明治十二年（一八七九）十月大阪大江座で初演されたが、その後作曲者が改曲、明治二十年に稲荷彦六座で二世大隅太夫と上演した。翌年には歌舞伎化され、人気曲となった。

疱瘡のために盲目となった沢市は、壺坂寺のひとり土佐町に妻お里と暮している。沢市は琴や三味線の稽古、お里は洗濯や針仕事で細々と生計を立てている。貧しいが幸せな毎日だが、気にかかることがある。それは夫婦になつて三年になるのに、お里は毎晩七つ（午前四時ごろ）になると、どこかへ出かける。問い詰められたお里は、夫の目が見えるようにと壺坂寺に願をかけていたのだった。沢市は妻の貞節を疑ったが、その心根を知ったので、これ以上迷惑はかけたくないと、谷へ身を投げる決心をする。そのあと、沢市の死を知ったお里が、沢市があつた世へ行っても手を引く人がいないと困るだろうと、続けて同じく谷に身を投げる。その夫婦愛に感じた観音様があらわれ、二人の命を助け、沢市の目も見えるようにしてくれる。二人は喜んで舞を舞うという筋。貧しいながらも夫婦の情愛は、きく人の心を打つ。

今日演奏されるのはそのうち「沢市内の段」で、妻の行動を疑う沢市とお里のやりとりを中心にした場面。なかでもお里のクドキ「三つ違いの兄さんと……」以下はよく知られている。お里の心根にうたれた沢市が、谷へ身を投げようと決心するまで。

## 四、新内 明烏夢泡雪—雪責め—

鶴賀若狭掾作詞・作曲。安永初年（一七七二）ごろの成立。「浦里時次郎」とも。ふつう上下に分け、上を「浦里部屋」下を「雪責め」という。

春日屋の時次郎は、山名屋の浦里となじみを重ね、借金で首がまわらない。死のうとして浦里の部屋に隠れていたが、遣手のかやに見付けられて、浦里は亭主に引き立てられ、時次郎は若い衆に表へ放り出されてしまう（ここまでが浦里部屋）。雪の降る山名屋の中庭で、浦里とかむろのみどりは古木に縛られ、亭主に折檻される。亭主が去つたあと、隣の二階から三下りのめりやすが聞こえてくるので、わが身にひきかえて嘆く、やがて時次郎が屋根伝いに助けにきてくれるまで。

「蘭蝶」「伊太八」とならぶ新内節の代表作。

## 五、清元 復新三組 盞（傀儡師）

二世桜田治助作詞、初世清元斎兵衛作曲。文政七年（一八二四）九月江戸市村座初演。三世坂東三津五郎の演じた三変化舞踊の一。同名の河東節、長唄曲からヒントを得た作品。

傀儡師（人形回し）が出て、その由来を語り、箱に入っている人形に八百屋お七、浄瑠璃姫、船弁慶などの物語を演じさせるといふもの。当時流行の「チョボクレ」や「よしこの」などが入っていて楽しい。



## 六、常磐津 乗合船恵方万歳

天保十四年（一八四三）に常磐津、富本、長唄、竹本の掛合で初演された。それを明治二十九年（一八九六）に常磐津だけに改めたもの。三世桜田治助作詞、五世岸沢式佐作曲。  
初春の隅田川の渡し舟を宝船に見立て、さらに乗り合わせた七人を七福神に見立てたもので、いかにも江戸末期の初春気分がいっぱい。それぞれ特色のある人物が、個性を發揮してあきさせない。

## 七、長唄 京鹿子娘道成寺

宝暦三年（一七五三）春、江戸市村座初演。杵屋弥十郎作曲。

道成寺の伝説は、もと女の執念の深さ、恋の執念の恐ろしさを語る仏教説話として知られた。「大日本法華経験記」では、紀伊国牟婁郡の寡婦が熊野詣での若い僧に懸想し、その執心が五尋の大蛇となり、鐘もろとも焼き殺す。しかし法華経の功力によって解脱するという物語になっていた。能楽の「道成寺」では、主人公が寡婦から、まなごの莊司の娘になり、同じく蛇体となり、道成寺の撞鐘に

隠れた山伏を焼き殺す。その娘の執心が白拍子にとりついて、再興された鐘供養の場にあられ、乱拍子を舞ううちに愛着がつのり、恨みの鐘に飛び入って鬼女となるが、住僧たちの祈りで退散させられる。

この話は全国的に知られ、琉球舞踊では「執心鐘入」、また「道成寺現在蛇鱗」「日高川入相花王」などの浄瑠璃、また長唄だけでなく、一中節、河東節、常磐津などにもとりあげられている。長唄ではそうした女性の執心はありながらも、踊りのテーマとしては別の方向に発展した。それは題名に「娘」とあるように、浮き立つような娘心、恋の不安と喜び、それも一人ではなく、幾人かの娘の姿と恋、それらを軽やかに、組み合わせるまとめたものといえよう。したがってこの作品は、誰にでも理解できるし、その華やかさが喜ばれるのであろう。数ある日本音楽の中でも、代表的な名作といわれるわけである。

## 第二部

### 一、長唄 元禄花見踊

本名題「元禄風花見踊」。竹柴瓢助作詞、三世杵屋正次郎作曲。明治十一年（一八七九）六月、新装なった東京新富座の開場祝いに初演。

思い思いの元禄風の衣裳に身を飾った男女が、花道から舞台へきて、それぞれの風俗を踊るという内容。しかし現在ではその筋をはなれて、明るく軽快ないかにも元禄風な気分にあふれた曲として喜ばれている。とくに「出立ち栄え」の後の出の方、「トーンチチン、チャチャシャチャチャン」以下は派手な旋律で、知らない人はいない。

今日の演奏会が三十回目という記念すべき会なので、長唄協会の女流連中六十四名という特別出演で、第二部のはじめを祝うということになった。

### 二、宮蘭節 鳥辺山

明和初年、宮蘭鸞鳳軒作曲。

京都の鳥辺野といえは淋しい場所で、古くから死骸を焼くところとなっていた。そこで元禄のころ

（一七〇〇年ごろ）におまん源五兵衛の心中事件が起きた。それが祭文などで知られ、やがて歌舞伎に取り入れられてお染半九郎の話になった。その道行は近松門左衛門の名文句で知られ、地歌になっていたのを、明和三年（一七六六）初演の義太夫「太平記忠臣講釈」で道行に使った。これは忠臣蔵を題材にしたものなので、塩谷判官の弟石堂縫之助と傾城浮橋が鳥辺山心中の真似をして遊ぶという趣向であった。これが好評だったので、その道行をさらに書き改めて宮蘭に移したもので、結局集大成されたものといっている。

若い男女の鳥辺山への心中道行で、整理された名文句、宮蘭らしい味が十分にあらわされている宮蘭節の代表曲で、「桂川連理柵」「夕霧由縁の月見」とあわせて三大名作といわれる作品。

### 三、常磐津 廓の仇夢（権八）

竹柴金作作詞、十四世常磐津文字太夫と小文字太夫（十五世文字太夫）の合作。大正八年（一九一九）十月、東京日本橋俱樂部で開催された常磐津家元秋季大会で初演。

白井権八は郷里因幡で本庄助太夫を討って立ち退き、江戸へ下る途中、大井川の関所を破り、そのほか多くの殺人罪を犯したので、鈴が森で磔の刑に処せられる。そこへ廓を抜けて小柴がやってくるが、検死の役人に引き立てられる。と思ったのは権八の見た夢で、そこは三浦屋の座敷。今のはさては夢であったかと、義理ある花川戸の長兵衛のことなど、二人の語らいのうちに、夢は正夢で、捕り手に囲まれるという筋。

白井権八は実在の人物で、処刑されたのは延宝七年（一六七九）のこと。馴染みの遊女小紫がその跡を追い、目黒東昌寺の権八の墓の前で自害したという。これが目黒の比翼塚の由来で、浄瑠璃や歌舞伎の題材になった。幡随院長兵衛とは時代が合わないが、歌舞伎の「鈴が森」は有名。先行作に清元「其小唄夢廓」（文化十三年―一八一六）がある。

#### 四、三曲 寿くらべ

作詞者不詳、美声で知られた二世山木検校（一八〇〇―五四）作曲。山田流の奥歌曲。浦島伝説を主題にしたもので「水の江という」で浦島の登場、合の手で舟のすすむさま表現して「我はそも」の言葉に誘われて龍宮に到着したあと「楽の合方」、エキゾチックな雰囲気になる。厳肅な気分のもと貝拾いから貝尽しになって神女の女心をあらわす。「楽しき中に」のあと故郷へ帰るが、童謡では「開けてくやしき玉手箱」とあるところを、「開けてのどけき如月の」となる。早春二月梅見の宴で老人たちの団欒になって、山の高さに比べて長寿高齡を祝ってにぎやかに結ぶというもの。なお二世山木検校には、このほか「子の日の遊」「夏の詠」などの作品があり、また一中節の「吉原八景」「賤機帯」などを一中・箏歌掛合ものとして導入したと伝える。

#### 五、新内 関取千両幟——稲川内から相撲場——

初世鶴賀若狭掾作詞・作曲とされていたが、鶴賀二代目家元鶴吉かもしれない。もとは同名の義太夫節で、明和四年（一七六七）初演の九段もの。その二段目から「稲川内」と「相撲場」を作った。鶴屋の若旦那礼三郎は、遊女錦木に馴染んでいたが、悪人九平太のために錦木を身請けの金をだま

し取られてしまう。しかしその場は親の浄久に助けられ、蟲貞力士の稲川に預けられる。そこから今日演奏される場面で、稲川は恩のある礼三郎のために錦木身請けの後金二百両を工面しようとするが期限は迫り、九平太が錦木を先に身請けするという。そこで九平太が蟲貞する鉄が嶽にわざと勝ちを譲り、あとで身請けを延ばしてもらおうと悩む。それを知った稲川の女房は、それほど大事なことを私になぜ相談してくれないのかと、髪を梳きながら恨みをいう。やがて取り組みが始まり、稲川が危なくなった時、二百両の進上金が読み上げられるので、鉄が嶽に勝つ。しかしその金は、女房が身を売った金であった。

もとの義太夫でも二段目の「髪梳き」と「相撲場」が有名で、「双蝶々曲輪日記」を下敷きにした相撲取りの立て引きを描いている。新内の「千両幟」での女房のクドキ「相撲取りを夫に持てば」以下は新内での創作で、のちに義太夫に逆輸入された。

#### 六、清元 深山桜及兼樹振（保名）

篠田金治作詞、清沢万吉（のち初世清元齋兵衛）作曲。文政元年（一八一八）三月、江戸都座で三世尾上菊五郎の演じた七変化舞踊「深山桜及兼樹振」の内、春の部「小袖物狂」として初演されたもの。

義太夫「蘆屋道満大内鑑」の二段目から趣向を借りたもので、恋人榊の前に死別した安倍保名が、形見の小袖を抱きしめたまま狂い歩く。数少ない男性の狂乱もの。初演の時も好評であったが、大正十一年（一九二二）に六世尾上菊五郎が新演出で踊ってから、ふたたび流行曲となった。

七、義太夫 新版歌祭文―野崎村―

近松半二作、安永九年（一七八〇）九月、大阪竹本座初演。世話物二卷。

油屋の丁稚久松と、主人の娘お染との心中事件は、宝永七年（一七一〇）。一説に延宝七年（一六七九）のことと伝える。実際は心中事件ではなかったという説もある。それを脚色した歌舞伎や浄瑠璃に「心中鬼門角」や「袂の白紋り」「染模様妹背門松」などがあつたが、本曲はそれらを集大成したもの。とくに今日演奏される「野崎村」が名高く、歌舞伎でもよく上演される。

油屋の丁稚久松は、集金した金を偽金とすり替えられ、野崎村の養父久作のところへ返される。ここには重病で目が見えなくなった後妻と、その連れ子お光がおり、久作は久松とお光を夫婦にしようと思つていた。そこへ久松が帰ってきたので、お光はうれしくてたまらない。そこへ久松と恋仲のお染があとを追つて訪ねてくる。久松はお染に山家屋への嫁入りをすすめるが、ききいれず、二人は心中を決心する。久作は、二人の仲を知つて意見をいい、別れることを納得させ、祝言にしようとお光を呼ぶ。はじめは嫉妬したお光だが、それを知つて髪を切り、尼になる。久作にいさめられた二人は、来合わせたお染の母、油屋後家お勝の扱いで、久松は駕籠で堤を、お染は船で、別れ別れに大阪へ帰って行く。

御 礼 邦 楽 連 合 会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆっくりとお楽しみ下さいませよう、お願いを申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御観賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年もここ国立劇場小劇場で、三月八日（木）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいませよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。

ありがとうございました。